

写真投影法を用いた自己理解教育の試み： 最終学年の福祉系専門学校生を対象にして

TAZAWA, Minoru / 田澤, 実

(出版者 / Publisher)

法政大学情報メディア教育研究センター

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学情報メディア教育研究センター研究報告 / 法政大学情報メディア教育研究センター研究報告

(巻 / Volume)

23

(開始ページ / Start Page)

119

(終了ページ / End Page)

126

(発行年 / Year)

2010-06-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00006916>

写真投影法を用いた自己理解教育の試み

～最終学年の福祉系専門学校生を対象にして～

An Attempt of Career Education using Visitor Employed Photography – a Research on the Final-year students in Welfare Vocational School

田澤 実

Minoru Tazawa

法政大学キャリアデザイン学部

The goal of this study was twofold; examination of (1) whether self-understanding in career choice is fostered through the coursework using visitor employed photography (VEP); and (2) whether this coursework was effective for students on choosing their career. In the first study, whether the coursework using VEP foster self- self-understanding in career choice was examined through longitudinal research. The results showed the changes in categories between pictures taken at time 1 and those at time 2. Half of the students recognized that the categories of the pictures they took had changed. In the second study, the effectiveness of the coursework on career choice was examined with using both subjective and objective indicators. The results showed that 80 % of the students who took the coursework had chosen their career by two months before their graduation. More than 40 % of the students recognized that the coursework using VEP was actually helpful in their career choice. It was suggested that coursework using VEP has certain effect as career educational strategy.

Keywords :visitor employed photography, self-understanding

1. はじめに

多様なメディアが存在する現代において、それらを高度に利用して行う教育の内容、方法等の開発が求められている。本研究では、写真という媒体を用いて、進路選択に向けた自己理解を深める教育を試みた。その効果測定について検討をしてみたい。

2. 問題と目的

進路を決める上で、自己の能力や興味について理解を深めることが、成熟した職業決定に必要であることは古くより指摘されてきた事柄である (Parsons, 1909 ; Super, 1957) ^{1) 2)}。特に自己理解については、頭の中でただ考えているのではなく、実際に文章として書き起こす、考えていることを言語化することが求められることが多い。ワークシートの利用や、

キャリアカウンセリング場面がそれらの例としてあげられるであろう。しかし、言語のみに頼る方法では、何を書いていいのかわからない、何を話していいのかわからないというような、そもそも言葉数が少ないようなケースには、困難が付きまとうことが予想される。このような場合、言語的なデータのみではなく、それ以外の側面からのアプローチが必要であると考えられる。

言語的なデータの代理および補足として、近年、質的研究の分野では、視覚データの再発見が進んでいる (Flick, 1995) ³⁾。そのひとつとしてあげられるのが写真である。写真には、必ずしもうまく言語化できなくても、撮影者の意識や認識が反映されるという特徴がある。特に、Harper (2000) による写真誘い出しインタビューのように、写真は、対象者から発言を引き出すきっかけとしても用いることができる ⁴⁾。この写真を用いた研究のひとつに写真投影

法があげられる。

わが国において、写真投影法という言葉を最初に用いたのは野田（1988）である⁵⁾。野田（1988）は、子どもに2本のフィルムを渡し、「一日の生活と好きなモノ」というテーマで写真を撮ってもらった。そして、子どもには、一日にしたこと、およびそれについて感じたことなどについての行動記録が求められた。野田（1988）は、この方法が、子どもたちの視野から環境を見る方法として有効であり、子ども達が自己の内面フィルムに外界を映していると考えた。個人と社会の間の世界を垣間みるこの方法を「写真による環境世界の投影的分析方法」、略して「写真投影法」と名付けた。このように写真投影法には、人々から見た環境（外界）をとらえる側面と、人々の心理的世界をとらえる側面の二つが含まれている（都筑, 2005）⁶⁾。

このような特徴を活かし、写真投影法は、教育実践にも応用されている。高野（2000）は、大学の「人間環境と教育」という科目で、大学周辺の地域における建築物、道路、場所、動物、人などあらゆる対象の中から、望ましいもの（こと）と望ましくないもの（こと）を撮影するように学生に求めた⁷⁾。その後、グループごとに、撮影された写真の中から望ましいものと、望ましくないものを選んで発表し、グループ全体で討論した。こうしたプロセスの中で日常では意識しにくいものへの気づきが促されていた実践を報告している。また、北川（2004）は、大学のゼミなどで、地域に出かけて写真を撮影したり、二人一組で相手の写真を撮影するという課題を出し、現像した写真を発表する機会を設けるといふ映像教育を試みている⁸⁾。それを通して、自分のまなざしが既存の概念にとらわれていないかという疑いを持ち、社会的評価に「正解」を見つけるのではなく、自分のまなざしの必然に自信をもって表現し、自分のまなざしを相対化する過程について報告をしている。これらの研究は、他者との話し合いや他者に対する発表という行為を通して、写真を撮影する過程では十分に自覚されていなかったことに気づいていくことを示している。高野（2000）は、人間環境における教育という観点、北川（2004）は自分のまなざしの相対化という観点から行われているが、このような写真投影法の特徴は自己理解を促す教育にも応用が可能であると思われる。

写真投影法を用いて自己理解を促す教育を行う場合、その効果測定をどのように行うのかという問題がある。教育実践に焦点を当てた高野（2000）、北川（2004）は、pre-post形式で、演習終了後の学生の感

想などで測定していた。しかし、進路選択に向けて自己理解を促す教育の効果測定を考える場合、以下の二点が必要であると思われる。

第一に、縦断的研究の必要性である。演習終了後に学生の感想などから気づきが促されていたことが確認できても、その後の学生の生活の中でどのような効果があったのかは検討がされていない。そのためには、1回の演習終了後に測定するだけではなく、複数の時点での測定が必要である。

第二に、主観的側面と客観的側面の両方の視点の必要性である。進路選択に向けた自己理解を扱うならば、学生の感想のみならず、学生の実際の進路先の決定状況と合わせて検討する必要があるであろう。

そこで、本研究では、写真投影法を用いた演習授業により、進路選択に向けた自己理解が促されるのか、そして、この演習授業が実際に進路を選択する上で効果があるのかを検討することを目的とする。具体的には、研究Ⅰでは、写真投影法を用いた演習授業により、進路選択に向けた自己理解が促されるのか2回にわたる縦断的研究により検討する。研究Ⅱでは、写真投影法を用いた演習授業がその後の学生の進路選択において効果があったのか、主観的指標、客観的指標の両方から検討を行う。

3. 研究Ⅰ

3.1 目的

写真投影法の「人々の心理的世界をとらえる側面」に注目し、写真投影法を用いた演習授業により、進路選択に向けた自己理解が促されるのか縦断的研究により検討することを目的とする。

3.2 方法

3.2.1 対象者

東京都内の福祉系専門学校の3年生（最終学年）12名（男性5名、女性7名）であった。調査開始時の平均年齢は20.08歳（SD=1.16）であった。対象者は、調査者の受講生であった（科目は心理学系の必修科目。週1コマで90分。通年科目）。

3.2.2 対象者の属性

対象者の学科における卒業生の就職先は、進学と一般企業が多数であり、合わせて半数を占める。その他は、医療機関、老人保健施設、特別養護老人ホームなどが多い。なお、対象者の学科は、国家資格を取得するための学科ではない。取得目標資格は余暇生活相談員、アクティビティ・ワーカー、キャン

ブ・インストラクターなどである。

3.2.3 調査時期

2005年4月から7月であった。

3.2.4 手続き

対象者に27枚撮りのインスタント・カメラを手渡して写真を撮ってもらうように依頼した。対象者に対する教示は、都筑(2005)を参考にし、「あなたがどのような人間であるか分かるような写真を一週間以内に撮って下さい(例えば、自分の大切にしているものや好きだと思うものを撮って下さい)。必ず自分自身で撮影して下さい。何を撮るかは自由です。人でも物でも風景でも構いません。一日に何枚撮っても構いません。同じものを何枚撮っても構いません。撮った写真の中からいくつかを選んでもらい、後ほど授業でなぜその写真が好きなのか解説していただきます。」とした。その後、対象者が撮影したインスタント・カメラを調査者が回収し、写真現像、CD-R プリントを業者に依頼した。現像代は調査者が負担した。

本研究における調査時期と手続きの概要を Table1 に示す。まず4月に写真撮影を上記の教示で、依頼した。そして5月、6月にかけて、回収と写真の返却を行い、リフレクション・シートへの回答を求めた。それをもとに全対象者にプレゼンテーションを行ってもらい、コメント・ペーパー、コメント・リプライ・ペーパーへの記入を求めた。そして、7月に第2回として、同様の教示で撮影の依頼をし、写真返却後、リフレクション・シートへ記入を依頼した。

発表に用いても良い写真番号をもとに、調査者がCD-R から該当する写真を抜き出し、プロジェクターを通してスクリーンに投影するように設定した。対象者には1人5分という制限時間内に、自分が選んだ写真が何であるのか、そして、なぜその対象が好きなのかプレゼンテーションをしてもらった。12人の対象者すべてにプレゼンテーションをしてもらった。残りの11人の対象者(プレゼンテーションの聞き手)には、そのプレゼンテーションを見て感じたこと、疑問、意外だったこと、気づいたこと、自分と違ったところなどのコメントを、コメント・ペーパーに記入するように求めた。記入時間はおよそ5分間であった。

プレゼンテーション終了後にそれらのコメント・ペーパーを発表者に手渡した。そして最終的にこれらのコメントを見て、どのようなことを感じたのか

コメント・リプライ・ペーパーに記入するように求めた。

Table 1 本研究における調査時期と手続き

調査時期	手続き
2005年4月	写真撮影依頼(第1回)
2005年5, 6月	写真返却 ↓ リフレクション・シート記入 ↓ 写真についてのプレゼンテーション ↓ コメント・ペーパー記入 ↓ コメント・リプライ・ペーパー記入
2005年7月	写真撮影依頼(第2回) ↓ 写真返却 ↓ リフレクション・シート記入

3.2.5 調査用紙

①リフレクション・シート

写真を返却した後、対象者にリフレクション・シートへの記入を求めた。リフレクション・シートで尋ねる内容は以下のとおり。まず、撮影した全ての写真について、1) 写っている被写体は何であるか、2) どこで撮影したのか、3) 撮影した写真の中でいちばん好きな写真はどれか、4) その理由を尋ねた。次に、自分の撮った写真で同じカテゴリーと思われる写真のカテゴリー分類を求めた。その際に、カテゴリーはいくつになっても良いことを教示した。そして、それらのカテゴリー名とそのカテゴリーの写真が好きな理由を尋ねた。

なお、第1回のリフレクション・シートのみ、後にプレゼンテーションしてもらうために、発表に用いても良い写真番号を回答してもらった。また、第2回のリフレクション・シートでは、第1回に撮った写真と照らし合わせて、第2回に撮った写真でカテゴリーが変化したか、対象者に尋ね、変わった場合は、なぜ変わったと思うか、変わらなかった場合は、なぜ変わらなかったと思うか尋ねた。

②コメント・ペーパー

以下のように教示した。「あなたの発表に対して、コメントが寄せられました。それぞれのコメントを読んで、改めて感じたこと、分かったこと、コメントに対する返事、感想などを書いてください。」

③コメント・リプライ・ペーパー

以下のように教示した。「___さんに対するコメント。(写真を見て感じたこと、疑問、意外だったこと、気づいたこと、自分と違ったところなど)」

3.3 結果と考察

3.3.1 撮影枚数、好きな写真の枚数、カテゴリ数

まず、第1回、第2回における撮影枚数、好きな写真の枚数、カテゴリ数の基本統計量を Table 2 に示す。撮影枚数の平均はおよそ 20 枚であった。おおよそ 75% 程度の枚数を撮影したことになる。しかし、最小値と最大値の差や標準偏差の大きさが示すように、個人差が見られた。自分の好きなものについて気軽に撮影できた者と、なかなか分からずに撮影できなかった者がいることが考えられる。

好きな写真の枚数については、平均で 10~13 枚目程度であったが、これも個人差が大きいと考えられた。都筑 (2005) は、小学生から社会人までを対象に写真投影法を行い、対象者の半数が 4 枚目までに最も好きな写真を示していたことから、撮影フィルムの枚数を 12 枚に減らしても信頼できる結果が得られると示唆したが、本研究の対象である専門学校生にとっては、ある程度の枚数を撮影できるように設定したほうが良いことが考えられる。

Table 2 撮影枚数、好きな写真の枚数、カテゴリ数の平均等

	M	SD	最小値	最大値
撮影枚数	20.83	7.81	5	27
	22.42	6.86	7	27
好きな写真の枚数	10.00	6.45	2	19
	13.17	10.38	1	27
カテゴリ数	4.17	1.11	2	6
	3.67	1.15	1	5

注: 上段の数字は第1回目、下段の数字は第2回目を示す

3.3.2 撮影された写真のカテゴリ

次に、対象者が回答した各写真についてのカテゴリ名を、さらに上位のカテゴリへ分類し、それぞれの上位のカテゴリの度数を算出した (Table 3)。分類カテゴリは、都筑 (2005) を参考にして筆者が設定した。次に、信頼性を確かめるために、上記の手続きに従って作成された分類カテゴリに基づいて、大学院生 1 名がすべてのデータに関して、対象者のカテゴリの内容を判定した。一致率は、 $\kappa = 0.87$ であった。このことから、さらに上位のカテ

ゴリーへの分類に関する信頼性はほぼ十分であることがいえよう。第1回では、「物 (40.82%)」、「場所 (18.37%)」、「友人 (14.29%)」が特に多かったが、特に、第2回では「友人 (38.24%)」のカテゴリが増加していた。第1回の際に友人を撮影した者のプレゼンテーションを聞いて、自分もあてはまると思った者が撮影したためと思われる。

Table 3 撮影された写真のカテゴリ、回答例、度数

カテゴリ名	回答例	度数	
		第1回	第2回
物	「好きな食べ物・飲み物」	20	7
	「愛用品」	(40.82)	(20.59)
場所	「家」	9	5
	「学校」	(18.37)	(14.71)
友人	「地元の友達」	7	13
	「学校の友達」	(14.29)	(38.24)
家族	「家族」	6	3
	「母」	(12.24)	(8.82)
風景	「桜」	5	4
	「現代建築」	(10.20)	(11.76)
恋人	「恋人」	1	1
		(2.04)	(2.94)
自分	「自分の一部」	1	1
		(2.04)	(2.94)
合計		49	34

注: カッコ内の数字は各回の合計に対する割合

3.3.3 カテゴリ変化の認識

全 12 人の対象者のうち、第1回から第2回にかけて自分の撮影した写真のカテゴリが変化しと思った者は 6 名 (50.00%) であった。以下に変化したと思った者 (男性 A) と思わなかった者 (女性 A) のそれぞれの例をあげる。

変化しと思った男性 A の第1回、第2回の写真のカテゴリを Table 4 に示す。第2回において「自分の趣味のもの」や、「野球」のカテゴリが現れた。男性 A のカテゴリが変化した理由についての自由記述を Table 5 に示す。「他の人が結構「物」を撮っていたので」と記述しているように、他者の好きなものを見ることにより、自分の周りの好きなものにも目が向くようになり撮影したと思われる。

Table 4 変化したと思った男性 A の第1回、第2回の写真のカテゴリ

	第1回		第2回	
	記述回答	枚数	記述回答	枚数
C1 「家族(家の中)」	9		C1 「クラスの友達」	6
C2 「バイト」	6		C2 「自分の趣味のもの」	12
C3 「学校」	12		C3 「野球」	9

Table 5 カテゴリーが変化した理由についての自由記述（男性 A）

前は、あまり「物」が少なかったもので、他の人が結構「物」を撮っていたので、自分も「物」を撮ってみようと思いました。それでも「人」を結構撮っていたので、大事なんだなと思いました。

続いて、変化しなかったと思った女性 A の第 1 回、第 2 回の写真のカテゴリーを Table 6 に示す。カテゴリーとしては、「自分の一部」から「自分の好きなもの」として変化があったが、女性 A は、変化がなかったと認識していた。全体的にカテゴリーが安定していたことから、それだけ自分の好きなものについてははっきりと認識していると思われる。女性 A のカテゴリーが変化しなかった理由についての自由記述を Table 7 に示す。「一週間という期間を写真の人やものたちと変わることなく毎日送っているから。」と記述している。これらのことから、既に好きなものをよく理解している者にとっては、他者の好きなものを見てもそれほど影響がないのかもしれない。

Table 6 変化しなかったと思った女性 A の第 1 回、第 2 回の写真のカテゴリー

第1回		第2回	
記述回答	枚数	記述回答	枚数
C1 「友人、仲間」	7	C1 「友人、仲間」	8
C2 「自分の一部」	8	C2 「家族」	8
C3 「家族」	9	C3 「自分の好きなもの」	6
C4 「恋人」	1	C4 「恋人」	1

Table 7 カテゴリーが変化しなかった理由についての自由記述（女性 A）

同じくらいの期間で撮れるのはほとんど日常のものしか撮れなかったし、それが私の日常の中で巡り合っている人や物だからだと思います。一週間という期間を写真の人やものたちと変わることなく毎日送っているから。

3.4 研究 I のまとめと次の研究への示唆

12 人中の 6 名が、2 回の写真投影法を通して、自分らしいと思うもの、自分が好きなものについて撮影した写真のカテゴリーが変わっていたと認識していた。それだけ自己理解を促したと思われる。しかし、これらの結果はあくまで演習終了後の pre-post 比較であったため、実際にその後の進路選択において効果があったのかどうかという点は検討できてい

ない。そこで、研究 II では、実際の進路選択終了にあたる時期で、この写真投影法を用いた演習授業が自らの進路選択に影響があったか検討する。

4. 研究 II

4.1 目的

研究 I の結果を受けて、写真投影法を用いた演習授業がその後の進路選択において効果があったのか、主観的指標、客観的指標の両方から検討を行うことを目的とする。

4.2 方法

4.2.1 対象者、対象者の属性

研究 I と同様であった。

4.2.2 調査時期

2006 年 1 月であった。

4.2.3 手続き

研究 I における写真投影法を用いた演習を振り返る調査用紙を配布した。主観的指標として授業に対する認識を、客観的指標として対象者の進路決定状況を扱うことにした。

4.2.4 調査用紙

①対象者の進路決定状況

「あなたは卒業の進路先が決定していますか？（ここでいう決定とは企業からの内定などを指します）」という質問項目を設け、「はい」または「いいえ」の 2 件法で回答を求めた。なお、進路決定者には、決定先を、進路未決定者には希望進路を尋ねた。

②授業に対する認識

「あなたは、前期の授業で行った写真課題（好きな写真を撮ってきてそれを発表する授業）は、自分の進路選択行動に役立ったと思いますか？」という質問項目を設け、「はい」または「いいえ」の 2 件法で回答を求めた。また、その理由について自由記述で回答を求めた。

4.3 結果と考察

4.3.1 対象者の進路決定状況

卒業年の 1 月の時点で、12 名の対象者のうち、10 名（83.33%）が進路決定者として、2 名（16.66%）が進路未決定者に分類された。進路決定者の内訳は、民間企業 7 名、福祉施設 2 名、一般病院 1 名であった。進路未決定者の希望進路は、一般病院 1 名、デ

ザイン系の仕事1名であった。

4.3.2 授業に対する認識

対象者自身が、写真投影法による演習授業を、進路決定時から振り返って役立ったと認識しているかどうか検討するために、課題に対する認識の回答等を Table 8 に示す。「はい」と回答した者は5名(41.67%)、「いいえ」と回答した者は7名(58.33%)であった。全対象者のうち、4割以上の者が、本研

究で用いた写真投影法による演習授業が実際に進路選択に役立ったと認識していることが分かる。また、「はい」と回答した者の中に、写真の категорияが変化しなかったと認識している者が含まれていた(5名中2名)ことは、必ずしも写真の変化 categoria が起きなくても、対象者自身が効果を認識することがあるということが分かる。

Table 8 課題の役立ち度に対する認識ごとの被験者の特徴

課題の役立ち度 に対する回答	性別	年齢	進路の決定/未決定	決定進路先(希望進路)	カテゴリー 変化の認識
はい					あり3名/なし2名
5名(41.67%)	男性	24	決定	有料老人ホーム	あり
	女性	20	決定	民間企業	あり
	女性	21	決定	民間企業	なし
	男性	24	未決定	(一般病院)	なし
	女性	21	未決定	(デザイン系の仕事)	あり
いいえ					あり3名/なし4名
7名(58.33%)	男性	22	決定	民間企業	なし
	男性	22	決定	民間企業	あり
	男性	22	決定	民間企業	なし
	女性	21	決定	民間企業	あり
	女性	23	決定	民間企業	なし
	女性	20	決定	福祉施設	あり
	女性	21	決定	一般病院	なし

4.3.3 進路選択に役立ったと認識した理由

写真投影法の課題の役立ち度に対する回答ごとに、その理由の自由記述を KJ 法によりカテゴリー分類し、それぞれのカテゴリーの度数を算出した。一人の学生が複数のカテゴリー内容について記述している場合もあったため、度数の合計が対象者の人数を超えるものがある。まず、「はい」と回答した者の自由記述より、写真投影法による演習授業が進路選択に役立ったと認識した理由のカテゴリーを Table 9 に示す。「自分の見つめなおし」、「好きなものの認識・志向」からは、写真投影法が進路選択に向けた自己理解の深化に役立ったことがうかがえる。「不向きなものの認識」については、一見、否定的なようにも解釈できる。しかし、進路を決めるきっかけとなったエピソードには、「希望先以外の進路選択活動・情報収集の結果」というカテゴリーがあることが指摘(田澤, 2004)されていることから、教育

の効果のひとつとみなす事ができるのではないだろうか⁹⁾。

4.3.4 進路選択に役立たなかったと認識した理由

課題の役立ちに対する質問項目に「いいえ」と回答した者の自由記述より、写真投影法が進路選択に役立たなかったと認識した理由のカテゴリーを Table 10 に示す。「既知」からは、すでに自分の希望する進路が明確となっている者には、写真投影法は、自己理解として何か新たな発見を促すようなものではないことが考えられる。また、「進路先と無関連」からは、写真撮影をする際の教示の改善の必要性がうかがえる。自分らしいと思うもの、自分の好きなものの写真を撮ってくるというものだけではなく、自分の将来とのつながりを意識させるような教示が必要になると思われる。

Table 9 写真投影法が進路選択に役立ったと認識した理由のカテゴリー

カテゴリー	度数	記述例
自分の見つめなおし	3	日常を送っていて、自分自身大切にしていかなくはいけないものがはっきりと分かったり、改めて気づいた部分もあって、人間形成には役立った印象です。
好きなものの認識・志向	2	人が好きなんだって再認識することができたから。人と接する仕事に就こうと決める手助けになったと思う。
両価的感情	1	役にも立ったし、迷わされもしました。
不向きなものの認識	1	会社勤めに向いていない趣味や考え方でることが写真によく表れていたの企業に就職しなくて良かったと思う。

Table 10 写真投影法が進路選択に役立たなかったと認識した理由のカテゴリー

カテゴリー	度数	記述例
既知	4	写真を撮る前から、福祉系に行きたかったから。
進路先と無関連	3	就職とは直接関係のないものを写したので。

5. 総合的考察

5.1 写真投影法を用いた演習授業の効果

本研究の目的は、写真投影法を用いた演習授業により、進路選択に向けた自己理解が促されるのか、そして、この演習授業が実際に進路を選択する上で効果があるのか検討することであった。

研究Ⅰにおいては、写真投影法を用いた演習授業において、進路選択に向けた自己理解が促されるのか2回にわたる縦断的研究により検討した。その結果、第1回と第2回では写真のカテゴリーに変化が認められた。また、自分の撮影した写真のカテゴリーが変化した認識していたと思った者が全体の半数いた。プレゼンテーションや他者との話し合いを通して、写真を撮影する過程では十分に自覚されていなかったことに気づいていったと考えられる点では、先行研究（北川, 2004；高野, 2000）を支持する結果となった。新たな知見として、演習で自分以外の者のプレゼンテーションを聞いた後に、再度、写真投影法を行ったことにより、何かに気づいたという意識レベルの変化だけではなく、実際に、気づいたものについて撮影できるものを探し、実際に撮影するという行動レベルの変化を引き起こしたことを明らかにしたことは意義があると思われる。

研究Ⅱにおいては、写真投影法を用いた演習授業がその後の進路選択において効果があったのか、主観的指標、客観的指標の両方から検討を行った。その結果、卒業年の1月の時点で、全体の8割以上は進路先が決定していた。また、全体の4割以上の者が、写真投影法による演習授業が実際に進路選択に役立ったと認識していた。

以上より、写真投影法を用いた演習授業は、ある程度の効果をもたらしたと考えられる。

5.2 キャリア支援ツールとしての可能性

上記のような効果をもたらしたと考えられる一方で、本研究は、対象者が12名というサンプル数で、写真投影法の特徴を活かして行う教育の内容、方法等の開発を試みるというものであった。よって、パイロットスタディ的な特色を持つことには注意しなくてはならない。最後に、写真投影法が持つキャリア支援ツールとしての可能性と今後の課題を述べたい。

下村・吉田・石井・菰田（2005）は、諸外国で開発されてきたカード式職業情報ツールは、表面に職業名、裏面に職業解説が掲載されているものが多く、言語的情報のみであったことを指摘し、職業名を手がかりに作業を行わせるよりも、視覚的な情報を手がかりに作業を行う方がガイダンス効果が大きいと考え、絵や写真を用いたカード式職業情報ツールを開発した¹⁰⁾。言語だけではなく、視覚的ツールを用いるという点では写真投影法と類似していると考えられる。相違点としては、あらかじめ用意された写真や絵を用いるのではなく、自分で写真を撮影するという点にあると思われる。また、写真投影法の場合、自分で撮影した写真であるため、それらは後々、ポートフォリオ（e.g. 鈴木, 2002）としても用いることができるという特徴があるであろう¹¹⁾。

Flick（1995）は、写真を用いた研究には、以下の4つのタイプがあることを指摘している。すなわち、1）調査者が、対象者に写真を見せて、それに関して質問するというタイプ、2）対象者をモデルとして、調査者が写真を撮るタイプ、3）調査者が対象者に、ある主題や時期に関する写真を見せてくれるように頼むタイプ、4）対象者が写真を撮っている間に、調査者がその様子を観察し、被写体の選択について分析する、である。下村・吉田・石井・菰田

(2005)によるカード式職業情報ツールは、第1のタイプに近い特色を持っているといえる。写真投影法は、調査者が対象者に、ある主題や時期に関する写真を見せて貰うだけでなく撮影して貰うという点、また、対象者が写真を撮っている間に、調査者がその様子を観察はしない点の相違点があるものの、第3のタイプ、第4のタイプと部分的に重なっているといえる。また、演習授業で用いる場合、撮影して貰うための期間が必要であるため、継続的に演習を行える環境が必要であることも特徴のひとつであろう。

5.3 今後の課題

今後の課題を三点あげる。

第一の点は、演習を行う際に必要とするコストが高すぎることがあげられる。本研究では、先行研究に従い、全ての対象者にインスタント・カメラを渡し、それらの現像費も負担した。しかし、その他の教授場面や演習などへの応用を考慮した場合、コストを低減させることが求められるであろう。これについてはデジタルカメラの併用などが考えられる。

第二の点は、教示文の改善の必要性があげられる。本研究では、写真投影法が進路選択に役立たなかったと認識した理由に、就職とは直接関係のないものを写したためというような「進路先と無関連」というカテゴリーが表れた。対象者の内省を深めるためには、撮影をしてもらう際の教示を改善する必要がある。これについては、徳田・尾崎(2006)、尾崎・徳田(2006)が行った写真投影法のように、過去・現在・未来という時間的流れの中で、ストーリーとして人生を再構成することを狙ったライフストーリーの観点を取り入れた教示などが考えられる^{12) 13)}。

第三の点は、対象層の問題である。冒頭でも述べたとおり、写真は、言語的なデータの補足としても用いることができる。よって写真投影法を用いた演習授業は、言葉数が少ないようなケースにおいて、語りを促し、自己理解を深めるきっかけとなりうるであろう。本研究では、すでに自分の希望する進路が明確となっている者には、写真投影法は、自己理解として何か新たな発見を促すようなものではないことが考えられたことからこのことは裏付けられる。今後は特に、どのような対象に行うことが良いのかも含めて検討が必要である。

参考文献

- [1] Parsons, F. 1909 Choosing a vocation. Boston: Houghton Mifflin.
- [2] Super, D. E. 1957 The psychology of careers. New York : Harper & Row Publishers.
- [3] Flick, U. 1995 Qualitative Forschung. Hamburg : Rowohlt. (小田博志・山本則子・春日 常・宮地尚子(訳) 2002 質的研究入門—<人間の科学>のための方法論 春秋社)
- [4] Harper, D. 2000 Reimagining Visual Methods : Visual Methods at the Crossroads. N. Denzin and Y.S. Lincoln(eds), Handbook of Qualitative Research(2nd. ed.) Thousand Oaks, New Delhi:Sage.pp.717-732.
- [5] 野田正彰 1988 漂白される子供たち—その眼に映った都市へ 情報センター出版局.
- [6] 都筑学 2005 写真投影法による青少年の内面把握の試み 教育学論集(中央大学), 47, 223-249.
- [7] 北川大 2004 「写真」を通して自分と向き合うということ—映像教育の実践の現場から— 教育, 703, 45-52.
- [8] 高野由美子 2000 大学の授業における環境教育的試み(2)「写真投影法」を用いた授業実践から家庭科教育, 74, 44-50.
- [9] 田澤実 2004 大学生の進路決定時期と決定理由—就職活動前後の大学3年生, 大学4年生を対象にして— 大学院研究年報(文学研究科篇: 中央大学), 33, 181-193.
- [10] 下村英雄・吉田修・石井徹・菰田孝行 2005 職業カードソート技法とキャリアガイダンス—カード式職業情報ツールの開発— JILPT Discussion Paper Series.
- [11] 鈴木敏恵 2002 ポートフォリオで進路革命! —就職&進学成功・インターンシップ評価指標— 学事出版.
- [12] 尾崎仁美・徳田治子 2006 ライフストーリーアプローチを用いた女子大学生の自己理解支援の試み(1) 日本発達心理学会第17回大会発表論文集, 300.
- [13] 徳田治子・尾崎仁美 2006 ライフストーリーアプローチを用いた女子大学生の自己理解支援の試み(2) 日本発達心理学会第17回大会発表論文集, 301.